

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

30

第三六回受賞作品（一九九五年）

川西町フレンドリープラザ 前編

一九九四年八月、山形県・川西町に図書館と劇場の複合施設がオープンした。設計は山形県を拠点とする建築家・本間利雄氏。前編は、作家・劇作家、井上ひさし氏が生まれ故郷に寄贈した「遅筆堂文庫」と、劇場ホールを一体化するプロジェクトが多くの人の熱意で生まれた経緯を紹介する。

川西町フレンドリープラザのエントランス。屋根をかけたアプローチが駐車場から入口までつながっている。雪をよけて歩ける「雁木（がんぎ）」の知恵が生かされている。

自然豊かな町に実現した、
本と演劇と交流の場

川西町は山形県南部の置賜^{おきたま}地方に位置し、南側を米沢と隣接している。周囲を美しい山並みに囲まれた盆地で、とくに冬は風雪が厳しいという。昔からの米どころで食べ物も酒もおいしく、自然の恵み豊かな地域だ。「川西町フレンドリープラザ」（以下、プラザ）はJR羽前小松駅のほど近くに建てられており、穏やかな風景のなかで、鉄筋コンクリート造に大きな勾配屋根が流れるように連なる姿が目に入ってくる。初めて訪れる

者には忘れたがたい光景だ。プラザは、川西町の出身で、戦後から現代の日本を代表する作家・劇作家、井上ひさし氏が二〇一〇年四月に七五歳で亡くなるまで、作品を生み出すごとに資料として収集した膨大な書籍・雑誌など二〇万冊を収めた「遅筆堂文庫^{ちひつどうぶんこ}」と町立図書館、さらに演劇を中心に計画された七二二席の劇場ホールを併設し、地域交流の拠点になっているという。一九九四年にオープンしてから二二年を経るなかで、井上作品のファンをはじめとして、全国から人が集まってくる。

井上ひさし氏の
故郷への思いが、若者たちや
町の人々とながら

プラザが建設されるまでには約一〇年にわたる前段のストーリーがあった。川西町は井上ひさし氏の生まれ故郷で、家庭の事情から中学の途中で一関、仙台へと転居したという背景がある。その後、作家・劇作家として活躍し、著名になってから、一九八二年、井上氏が四七歳のときに母校の小松小

学校で講演を行ったことがきっかけとなり、あらためて地域の人たちとの交流が生まれていった。

「当時、若者の地域活動のグループがあり、そのメンバーが井上ひさしさんに手紙を差し上げて講演会が実現したんです」。川西町の企画課で企画担当だった遠藤勝則氏が発端を語ってくれた。「講演会の翌年には井上さんが書いた戯曲を上演する劇団『こまつ座』が東京で旗揚げされました。それに呼応するように若者グループが『山形こまつ座』という応援団を結成し、観劇の機会を提供する活動を続けていきました」。現在、プラザの館長を務める阿部孝夫氏は当時の若者グループのリーダーだった。「せっかく、おもしろい芝居が各地で上演されているのに故郷の人たちが観たことがないというのは寂しいと思ったんですよ」と阿部館長。米沢などで会場を借りて、年に二、三回のペースで「こまつ座」の公演を行った。また、横沢三男町長（当時）のもとで、川西町として「こまつ座」が公演する劇場をつくっていったらという

模索も行われていた。

こうした交流が続くなかで、七年、井上氏の離婚をきっかけに膨大な蔵書が川西町に寄贈されたことから「遅筆堂文庫」が誕生した。「井上さんは僕らが世の中に流されずに生きていくには、一定以上の数の本が必要で、本を読んで勉強し、知恵を蓄えるようにという思いをもっておいででした」と阿部館長が当時を振り返る。横沢町長が指揮をとり、企画課が動いて蔵書の受け入れ態勢が整えられた。町の多くの人の協力もあり、「農村環境改善センター」の二階を利用することになった。若者グループが井上氏の自宅があった千葉県市川市から運んだ本は当時で七万冊。一トトラックで四回に分けて運び、さらにセンターの書棚に整理するのは気の遠くなるような作業だったという。注目されるのは、井上氏が設立時の講演で、図書館は読書場だけでなく、同時に「人の集まる場所」でありたいと語ったことだ。「井上さんが『生活者の視点で自らの暮らしをもう一度見つめなおそう』と提



1階東側は井上ひさし氏の蔵書をもとに設立された「遅筆堂文庫」。入口付近には「井上ひさし展示室」が設けられ、年譜や、貴重な自筆資料などを見ることができる。蔵書数は雑誌を含め現在20万冊。



プラザの西側に設けられているホール。演劇中心の舞台と客席が一体となるように全体の構成や音響に配慮されている。

唱し、作家や識者を招いて、皆でいろいろなテーマについて勉強する機会をつくろうということので、八八年に遅筆堂文庫・生活者大学校を開校しました」と遠藤氏。第一次のテーマは「農業講座」だった。こうして新たな交流の場が生まれ、地元と井上氏のつながりも強くなっていったという。

地域間交流と情報発信の拠点として遅筆堂文庫と劇場ホールを一体に

町の行政として新たな取り組みが動き出したのは一九八九年。当時の自治省の施策で地域間交流の促進を図るリーディングプロジェ

後方墳で、四世紀につくられたと推定されている。「最初はあまり意識していなかったけれども、古墳はエネルギーを持っているんですね。結局、建物の南北の軸線を古墳に合わせるかたちでエントランスとロビーを一直線に配置し、その向こうは田園風景と吾妻山系



エントランスを入るとロビーが広がり、右手にホールに向かう大階段があらわれる。ロビーでもコンサートや演劇などのイベントが開かれ、階段が客席になることもある。

クト事業の指定を受け、「フレンドリーヒルズ構想」を立ち上げて採択された。構想の柱の一つである「であいの丘」という位置付けを持った、人々の出会いと交流、情報の集積・発信を担う施設として「川西町フレンドリープラザ」は計画された。「農村環境改善センター」に設けられていた遅筆堂文庫を移設し、劇場ホールを一体にした施設を整備する計画だった。

建築設計は山形を拠点とし、地域性を生かした設計活動が続いている建築家・本間利雄氏に託された。建物の形は地域の伝統に根差し、屋敷林をもつ民家（散居集落）をイメージしている。南側を見ると、背の高い蔵や納屋、民家がおおらかな姿でつながり、屋根が西から東へ一三〇度近く連なっている。「環境を捉えた設計で、冬の西風が強いので大きなホールを西側に置いて西風を受け、東側に文庫・図書館を小さくつくり、受け流しています」と本間氏。また、敷地を大きく特徴づけているのは北側に接している天神森古墳だという。東北地方でも最大級の前方

の山並みが開けるという展開になりました」。五〇頁の平面図でわかるように、エントランスの正面には古墳を借景にした野外ステージも設けられた。開館当初に薪能を行ったときの雰囲気のすばらしさが多くの人の記憶に残っている。ロビーも交流スペースとして設計され、コンサートやイベントによく使われている。

また、古墳のなだらかな曲線に沿って、駐車場からエントランスへ向かうアプローチが設けられている。「アプローチは『雁木』なんです」という本間氏の解説で、軒を設け、雪をよけて歩く雪国の町の工夫が生かされていることを知った。さらにアプローチは、観劇のあとの余韻を味わいながら歩く道のりが欲しいという井上氏や構想をつくった関係者の希望を実現している。歩いてみると、円柱が連続し、風景が見え隠れする様子が普段とは違う時間に誘ってくれるようだ。プラザへ入っていくと、本の空間と、劇場ホールの空間は、それぞれに大切に使われている輝きを感じさせるものだった。

建築主より

フレンドリープラザは町の財産。建物を守り、次のステップにつながります



山形県川西町 調整監・総務課長
遠藤勝則 Yasunori Endo

農村環境改善センターの二階に遅筆堂文庫ができたときは、話題性と、すばらしい本や貴重な資料があるので、全国から閲覧したいという方々がおいでになり、センターの稼働率としては群を抜いていました。開館に併せて井上ひさしさんから寄せられた「遅筆堂文庫堂則」の思いを受け、新たな広場づくりに向けた活動が始まりました。遅筆堂文庫・生活者大学校もその一つです。プラザが建つまでに時間はかかりましたが、器があれば中身はすでに用意されてい

た状況だったわけですね。

ホールの場合も、一般には何でもできるような、フラットなものになりがちですが、あくまでも芝居小屋をつくるという思いがありましたので、特徴のあるホールができました。財源の都合で、縮小せざるをえなかったスペースもありましたが、芝居を見て、本を読み、交流が生まれ、人々の思いが集う空間ができたと思っています。時間がたつにつれて、施設の価値が下がる場合もありますが、プラザは、子供たちや、周辺地域の方々が「プラザ付属演劇学校」で芝居を通して活動したり、井上ひさしさんの作品を研究する方々で、遅筆堂文庫の存在価値が大きくなると、次のステップにつながっています。それを支える器として、建物の維持管理は大切です。プラザの活動が続くことで、町を特徴づける顔を持ち続けることができます。

設計者より

自然環境を捉えながら多くの人の信頼の中で設計しました



株式会社本間利雄設計事務所
代表取締役
本間利雄 Toshio Homma

横沢三男川西町長は当時から地域おこしの視点をお持ちで、芸術を理解されている方でした。井上ひさしさんと交流が始まったころから、川西町で劇場をつくって「こまつ座」を迎えたいと考えておいででした。プラザにホールが実現したのも、それまでの町長の想いが大きかったと思います。演劇を主にした設計で、デザイン面では壁面の色をできるだけ抑えています。

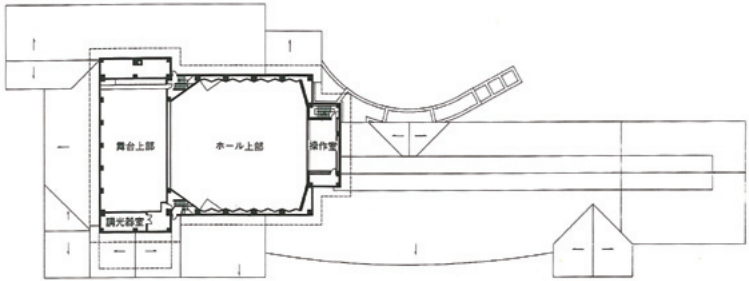
竣工時に、井上さんが劇場のステージに立って眺めながら、ホー

ルの大きさが非常に気持ちいいとおっしゃいました。観客席とステージが一体になっている、こんなホールは初めてですと挨拶をされたのが記憶に残っていますね。

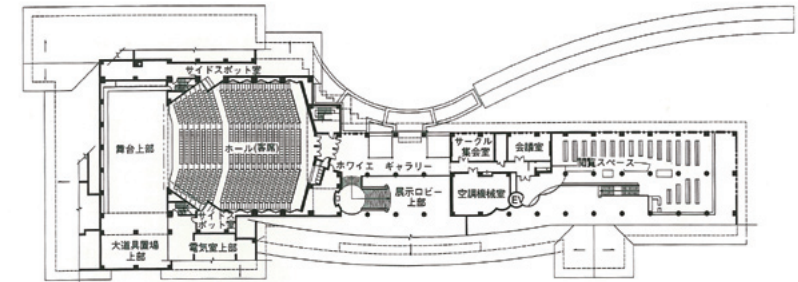
建築というのは建物だけあればいいというものではなく、芸術と支え合って全体を構成することも大切です。プラザの大きな階段の踊り場には、抽象の彫刻家・土谷武さんがつくられた作品があります。ロビーの壁面には川西町出身の画家・黒澤梧郎さんが古墳をテーマにして描かれた絵が掛けられています。まだ工事中でプラザの一階の部屋ができたとき現場で描かれたんです。初代館長になられた竹田又右衛門さんもユニークな方でした。

あらためて振り返ると、プラザは多くの方々との信頼関係のなかで設計ができたうえに、施工会社と気持ちが一つになり、共感してできた建築だと思っています。

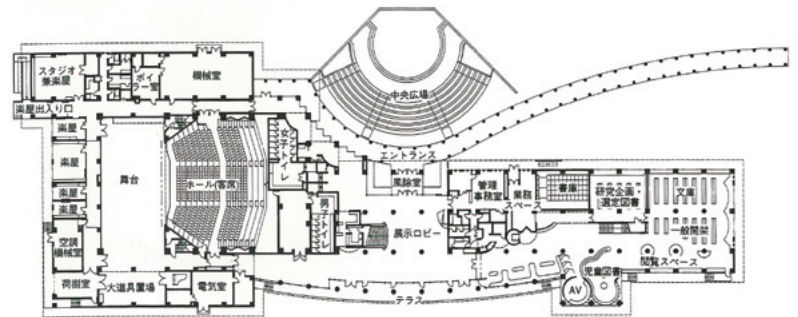
3階平面図



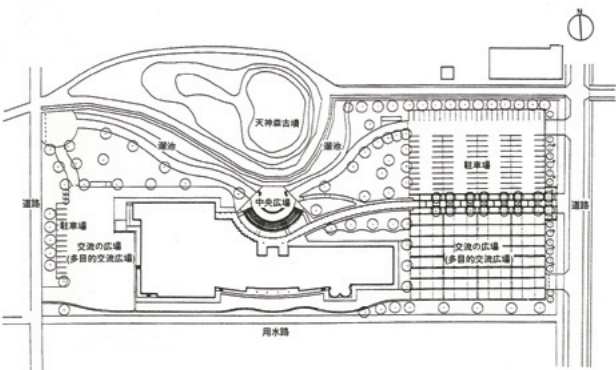
2階平面図



1階平面図



配置図



川西町フレンドリープラザ

米沢駅からJR米坂線で羽前小松駅下車徒歩5分



計画概要

所在地：山形県東置賜郡川西町大字上小松1037-1
建築主：川西町
設計者：株式会社本間利雄設計事務所
施工者：安藤建設株式会社(現・株式会社安藤・間)、株式会社殖産工務所
竣工：1994年3月
敷地面積：21,901.00㎡
建築面積：3,923.94㎡
延床面積：4,618.29㎡
構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造
規模：地上3階、塔屋1階

